

「大原御幸」は今年の5月以来半年間、通奏低音のごとく私の心の中で鳴り続けた曲です。と言うのは白謡会の春の会後に秋の会の素謡として「大原御幸」が私の課題に決まったからです。

私の最近の観能は演者に惹かれて見ることや、運よく頂きもののチケットが手に入って見に行くことが多いのですが、「大原御幸」は違います。課題がどの様に舞台上で表現されているのか、どう演じられるのか知るため、かなり真剣そのものに見てきました。ただこの真意を種明かしするには、とりあえず私自身の素謡発表会が終わってから観能記を書こうと思い、今日に至りました。

能「大原御幸」は上演されることの少ない曲だと思います。私自身、繰り返し10回位見た曲もあるのに、「大原御幸」は2006年シテ青木一郎師で一回見ただけでした。その時は白い頭巾(花帽子)の女性3人の姿が美しいという印象はありましたが、思えば10年前ですから、詞章に対する理解もなく、面白味を覚えるまでに至りませんでした。

実際に能「大原御幸」は難度が高いだけでなく、登場人物が多く、上演時間が長い(1時間50分!)ので、いざ見たいと思ってもなかなか公演がなく、それだけに今回、この時期に見ることが出来たのは、とても幸運でした。それどころかこの公演は珍しさもあるのか見所は満席でした。

能「大原御幸」2016年9月18日 国立能楽堂 能楽 BASARA 公演

シテ建礼門院・駒瀬直也 局・坂真太郎 内侍・永島充 法皇・観世喜正 ワキ・森常好 ワキツレ・工藤和哉
地頭・関根知孝 他。大鼓・佃良勝 小鼓・鶴沢洋太郎 笛・松田弘之
舞台には大きな藁屋の作りものが置かれ、まずワキツレが法皇の大原・寂光院行幸を告げます。

すると作りものの幕がはずされ、床几に座ったシテ、両横に局と内侍。白い花帽子の3人の姿が絵のように美しい。ただそれだけでないのが、3人の連吟の素晴らしさ。侘び住まいの情感が漂い、震えがくるほどでした。3人の連吟でこれだけの情景を表現するとは・・・謡は本当に奥が深い(同時にとても難しくそうで、私は出来るかしらと凄く不安を覚えた場面でもありました)。

法皇は重責ですが、まだ若い喜正さんが演じ、その分、大変高度な技巧を使われている点に感心しました。ワキの森常好さんの謡には気迫と存在感があって、この役も重要なのだと言う認識を持ちました。シテのみならず、どの役もそれぞれ際立った技量で、大原御幸はオールキャストで演じられ、また演じられてこそ成功といえるものだと分かりました。

後半の建礼門院の語りはハイライトですが、とにかく終始ほとんど動きのないことで有名で、所作は全体を通して3回シオル(涙)だけ。詞の内容が解らなければ、とても退屈な能です。でも詞が解り、その情景を想像して見ていると、動きのないことなど全然気にならないどころか長いとも思わず、能としてさすが名作だと思いつく感じ入りました。以来、その後の私の謡の稽古に一層身が入り、とても役に立つ観能でした。(効果はまったく別として…笑い)。

今回「大原御幸」という課題を頂いたお陰で、平家物語に関心を持ち、いろいろ調べ勉強もしました。語りの中心になる壇ノ浦に行ったことがなかったので、10月1日秋晴れの日、小倉に住む友人の案内で倒頭行って来ました。本州と九州が最も接近した関門海峡は幅600メートル、そこが壇ノ浦の戦場です。潮のぶつかり合う紺碧の海は所々渦を巻き、ここに源平4千の舟が入り乱れ合戦し、様々な悲劇を紡いだかと思うと、感一入でした。近くにある安徳天皇を祀る赤間神社は、波の下の極楽浄土を表すように竜宮門になっています。碇を担ぎあげた知盛像もある「みもすそ川公園」には、壇ノ浦古戦城址の碑と安徳帝御入水之处碑があり、二位殿による辞世「今ぞ知る みもすそ川の御ながれ 波の下にもみやこありとは」が刻まれ哀切を覚えました。

(拙句 「秋の海底に浄土や壇ノ浦」)

この辺りは「碇潜」や「和布刈」の謡蹟もあり、興味は尽きません。謡曲をきっかけに、様々なことへ私の好奇心が広がり、意義深い「大原御幸」でした。

尾崎 純子